



ロヒンギャ危機
「民族浄化」の真相
中西嘉宏・著
中公新書 / 968円

なぜ「民主化の象徴」は ジェノサイドを否定したか

国軍によるクーデターで世界の耳目を集めるミャンマーで、かねてより問題視されていたのがロヒンギャ問題だ。二〇一七年八月からの四カ月間で約七〇万人の難民が発生した「ロヒンギャ危機」。民主化の象徴だったはずのスー・チー氏は、その時から現在に至るまで、国軍によるジェノサイドを否定し続けた。スー・チー氏の意図はどこにあるのか。本書は、文民政権と国軍の「分断政府」の現実を読み解くことで、真相に迫っていく。

「ブレグジット」という激震
湿迷するイギリス政治
スティーブン・デイ/カウ昌幸・著
ミネルヴァ書房 / 3850円



「統合」に背を向けた 英国はどこに向かう

二〇二〇年一月三十一日、英国はついにEUを離脱。英欧関係は新たな時代に入ったが、その先行きは依然として不透明だ。本書は、EU離脱をめぐる国民投票だけでなく、その結果が実施されるまでの過程、すなわち離脱交渉と国内政治も射程に入れて分析する。国民投票にも表れた、階級投票の衰退による二大政党制への影響や「連合国家」としての一体性の動揺など、今後の英国政治に関する展望は興味深い。

「民主主義の模範国」は なぜ弱体化したのか

安定した民主体制が続いたラテンアメリカの「民主主義の模範国」ベネズエラ。世界最大の石油埋蔵量を誇り、長期にわたる経済的安定で国外の移民を惹きつけていたにもかかわらず、治安は悪化の一途をたどり、貧困率が九割を超える難民発生国となってしまったのはなぜ？ チャベス政権誕生以降のストーリーをたどりながら、政治、経済、外交などさまざまな側面からベネズエラの「なぜ？」に迫る。民主主義の弱体化が見られる世界に教訓を示す良書。



ベネズエラ
溶解する民主主義、破綻する経済
坂口安紀・著
中公選書 / 1870円



パンデミックの倫理学

緊急時対応の倫理原則と新型コロナウイルス感染症

広瀬 巖・著

勁草書房 / 1980 円

コロナ禍で浮かび上がる究極の哲学的問題

誰に人工呼吸器やワクチンを優先すべきか。基本的権利や自由はどこまで制限されるべきか。未曾有の新型コロナウィルス感染症パンデミックは、人間の生命や生活にかかる重要な倫理的問題をわれわれに突きつける。医療資源分配の倫理学の専門家が、WHOで新型インフルエンザ対策の倫理指針作成に携わった際の議論をもとに、コロナ禍の倫理的問題を丁寧に分析する。コロナ対策に新たな哲学的視座を与える必読書。

権威主義

独裁政治の歴史と変貌

エリカ・フランツ・著

上谷直克 / 今井宏平 / 中井遼・訳

白水社 / 2750 円

複数政党も選挙もある「独裁」の現在



権威主義が、一様に横暴な独裁者や一党制による支配を意味するものではない、ということをご存じだろうか。実際には権威主義国の多くが、民主的な制度を導入し、多様な外見を有しているのである。では、権威主義体制のなかの「権威」とは何者か。それはどのように始まり、どのように終わるのか。民主主義国は権威主義国とどう向き合うべきか。一括りに論じられない「独裁」の実態を、丹念にひも解いてゆく。

戦国武将の外交顧問となったイギリス人航海士——。その存在は人々の想像力をかきたててきたが、彼の実像はあまり知られていない。ベルギー出身の著者が、西洋語のみならず日本語史料も駆使した本書が浮き彫りにするのは、大航海時代、イギリス・オランダがスペイン・ポルトガルの大帝国に挑むさま、限られた情報を批判的に検討し西洋諸国との交易に乗り出す徳川家康の優れた外交手腕、そして世界史から見える近世日本の姿だ。

ウィリアム・アダムス

家康に愛された男・三浦按針

フレデリック・クレインス・著

ちくま新書 / 1012 円



大航海時代の世界史から近世日本を捉えなおす